

◆飯塚ひろし 選

俳聖 芭蕉の句より

一つ脱いで後に負ひぬ衣がへ 松尾芭蕉

旅の途中で更衣の時期が重なり、極めて無造作に一枚脱いで、背中に背負うとは、可笑しみと「軽み」とウイットとがこの句の詩因である。一枚脱いで背負ったのが、簡単ながら旅の更衣だと言う。表現の「軽み」にも拘わらず、奥が深く、心を打つ感動が強い。

蚤(のみ)虱(しらみ)馬の尿(しと)する枕もと 松尾芭蕉

芭蕉の奥の細道がこの通りの旅であれば、誠に過酷な旅である。馬小屋に隣の部屋に宿をとり、蚤や虱と格闘した上に、枕元では「しゃ一つ」と馬が尿をする、悪戦苦闘の旅寝であった。これは巧まざる芭蕉のユーモアである。その実、芭蕉の宿は、封人の家であるから、文字通り馬と鼻を突き合わせて寝てはいない。「尿前の地を経て、出羽の國を越えんとす」。地名が珍しいので、これからヒントを得た創作劇であった。

一家(ひとつや)に遊女も寝たり萩と月 松尾芭蕉

襖一つを隔てて、遊女と寝たとは、いかに謹厳実直な芭蕉翁にても、さぞ寝苦しかったであろう。奥の細道の単調な旅に彩りを添えるために、物語的興味を盛る虚構との見方が強い。襖越しに聞こえる嬌声や衣擦れの音を耳にし、寝ようとするが、寝付かず苦悶する芭蕉翁。遊女と同宿した喜びに、芭蕉は季語を二つまで添えた。萩が芭蕉で遊女が月などと推量すると眠れなくなる。

鞍壺に小坊主乗るや大根引 松尾芭蕉

小坊主を中心に引き立てて、軽いユーモアを感じさせるところに、此の句の焦点が置かれている。芭蕉は、俳諧の極致を極めた結果「軽み」に到着した。だから、芭蕉にとって「軽み」を説き、「流行」を説き、「去私」を説くことは、詩歌の伝統についての歴史的な行為であった。大根引の平

明な表現の中に、永遠性を志向した「軽み」「ユーモア」が表現されている。滑稽俳句は、大笑いで大向うを唸らすより、軽みとウイットのある作品の方がより「ベター」であると思う。

◆日根野聖子 選

暮目良雨 「2013 一日一句集」

文机は歌の俎寒燈下
つくづくと庶民は気楽鮪喰ふ
女正月スカイツリーを燭と見て
寒夕焼ものの骨格焙りだす
パソコンも冬の螢と言ふべかり
ぐづくぐと意志の溶け出す春の風邪
とぶもののみな美しや春二番
誤字脱字記憶違ひに日脚伸ぶ
熱き湯に顎遊ばせて彼岸かな
入学す嫌ひな野菜食べるため
こでまりにちよつかいを出す登校児
何億回沈めど新た春夕日
ご破算で願いましては四月尽
筍流しによきによき高層ビル生れ
あぢさゐの小坊主どもが路地塞ぐ
六月や駅で素知らぬ別れして
ごつくんと何呑み込むや墓
どんぶりの重さ老舗の鰻喰ふ
部屋擦つて七夕竹を担ぎ入る
此の世から少し離れて涼み舟

夏痩せになるなと妻に肉を焼く
雨音の葉ずれ仕立てや夏座敷
すててこや辞林に迷ひ抜けられず
扇風機横向くことを忘じけり
流星の引く今生の光りかな
蟬死して胸に組みたる手を密に
人生の大方釣瓶落しかな
鱈の身のほぐるるやうに我が貧句

著者は、昭和十七年、埼玉県生まれ。「春耕」の皆川盤水、「風」の澤木欣一に師事。現在、「春耕」の編集長で俳人協会幹事である。芭蕉研究、蕪村研究を長く手がけ、現在は高野素十を研究する。「駿河台」「神楽坂」「平成 食の歳時記」の句集の他、二〇〇九年から二〇一三年まで毎年、「一日一句集」シリーズを発刊する。三六五の俳句の他、その日一日の政治、経済、スポーツ、芸能、文学、あらゆる分野の出来事が著者の視点で簡潔にまとめられており、句集としてはもちろん、読み物としても面白い。国内外のニュースの他、食器棚の扉を修理したことや、家族の介護のことなど著者の日常もそれとなく描かれる。俳画、挿絵も楽しい。